OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パルパサ・カフェ ： ヒマラヤ☆アートカフェ計画
Author(s)	ナラヤン, ワグレ; 北田, 信
Citation	印度民俗研究　別巻. 2016, 5, p. 24-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パルパサ・カフェ
ヒマラヤ☆アートカフェ計画

ナラヤン・ワグレ

訳　北田　信

第一話

「珈琲トークのワグレさん」

ビレンドラ国際会議センターで、桟敷席のごったがえした観客の方から、僕の席のところに、紙を折って作った鳥が舞い降りてきた。「あなたの小説はいつ出るの？」と書いてあった。

歌手ディープ・スレシュタのライブが始まろうとしているところだった。幕はまだ開いておらず、会場の灯りがついているうちに僕はその手紙を読み、周りの友人たちに見せた。友人たちは笑った。2時間のプログラムで、ディープはバンド演奏に乗って新曲や旧曲を幾つか歌った。〝ぼくは遠くから来た〟という歌声が流れる頃、僕は薄明かりの中で手紙を読み返した。

振り向いて桟敷席の方に目を凝らしたが、込み合う群衆の中に人を見分けるのは難しかった。が、誰かが手を振って僕に笑いかけたような気がした。〝あのひとは茶畑で〟歌手は歌い続けた。

僕はカンティプル誌（カトマンドゥの日刊新聞の名前）に毎週連載していたコラム『珈琲トーク』を一時休載しているところだった。前から着手していた小説を書き上げたいと考えてのことだ。「編集長にまでなっておきながら、一体なんで小説なんか」と言われた。

また別の人には「新聞記者ならなんでノンフィクションを書かないんだ」と怖い口調で叱られた。

新聞の仕事の忙しさのなかで合間を縫って書き始めた僕の小説を邪魔だてするかのように、この国の情勢が緊迫しはじめた。そうするうちに小説の主人公とこの国の生活との両方に、思いもよらない出来事が否応なく次々と起こった。この物語と、それを執筆した時期との間の関係は、単なる絵空事ではない。僕ら自身がまさにそういう時期を経験しつつあり、そこでは事実と空想との、そして錯覚と真実との距離がだんだん消え去っていった。

冬の雨で洗われたカトマンドゥで、僕はタメル地区[1]に向かっていた。若者たちが「山の方では雪が降ったらしいよ」と言いながらバイクでナガルコート[2]方向に急いでいた。バクタプル[3]に向かう道路には渋滞する自動車の列もできていた。カトマンドゥの冷たい空気には土の匂いが漂っていた。雨がやんで空は澄み渡っているから、カトマンドゥからでも屋上レストランに登れば、山々に降ったばかりの雪が見えるはずだ。

レストランの階段を登ろうとすると、降りてきたウェイターがトレイから片方の手を離し、こちらに差し出して言った。「こないだ、あなたの写真を見ましたよ。」僕が立ち止まると彼は続

---

[1] カトマンドゥ市・旧市街北側のホテル街。外国人旅行者が多く、洒落たレストランやカフェが集まり、賑わっている。

[2] ナガルコートは標高2100mの丘の上にありヒマラヤの眺めがよい。カトマンドゥ市から比較的近くにあって行きやすいビュー・ポイント（眺望所）として人気がある。

[3] 首都カトマンドゥ市から東に12キロほどのところにある古都。カトマンドゥ市からナガルコートに向かう幹線道路の途中にある。

けた。「あなたが執筆している写真でね。タバコの煙をもうもうと吹きながら」

銃が煙を吹いたわけではないのだから、いいじゃないか[4]。

狭い階段をすれ違いざまに、この男はさらに付け加えた。「本を書いてらっしゃったのはこの辺のレストランですか？」

「あれ、お客さん？」僕が何も答えずに階段を登って行くのを見て彼は怪訝そうにした。

「上の階に席は空いてるかな？」とだけ僕は訊いた。

花瓶に生けられた慣用植物[5]の横のテーブルに着き、コーヒーをポットで注文してから、僕は友人のドリシェに電話した。ドリシェは携帯に出るやいなや慌てた様子で「すぐに行く」と言った。

僕はここでドリシェと待ち合わせをして喋る約束をしていた。小説を完成する前に、彼について知りたいことがまだたくさんあるのだ。これは彼の物語だからだ。そこには彼の世界図が描かれているのだ。彼の体験と想像がこだましているのだ。彼自身が画家なので、僕の書き方についても一家言あるのだ。この小説を書くように僕に仕向けたのも彼だ。いま僕はひとつの画家の物語を仕上げようとしているところなのだ。僕ら二人の間には、絵と鑑賞者との間にあるような、或る一つの関わりがある。彼の物語を僕がどういうものとして書いたか、といえば、これは僕自身の生き方そのものだ、と読者は考えてくれていい。

彼にはひとつ計画がある。コーヒー園をやるために西部ネパール山地の丘陵地を開墾したいというのだ。その土地でアートとコーヒーを融合したいのだという。それをしたいがために彼は再び出発する。で、彼が旅に出てしまう前に、僕はこの小説を彼にどうしても聴いてもらいたいのだ。丘陵地で、彼は地元の古い家屋や築材を生かした建築をつくりたいという。アート・ギャラリーも入っているし、トレッキング客が泊まれるゲストハウスや図書館も作るんだ。インターネット設備のあるギャラリー・カフェも。カフェの名前ももう考えてあるんだ〝パルパサ・カフェ〟と。

パルパサ・カフェはドリシェの未来だ。その場所を、芸術を愛する人々が考えを練り着想を得ることができる、憩いの場にしたいのだ、と。ギャラリーと図書館の左側に螺旋階段がついていて上階のカフェに通じている。カフェの向こうは壁で隔てられてゲストハウスになっており、その上には緑いっぱいの山、そしてさらに上に、天気が良い朝にはダンチュリ・ヒマールの白い峰々が見えるのさ。そしてそれよりも上の汚れなき天空には、長い旅をしてやって来た渡り鳥たちが漂っている。彼らが誘われてやって来るような、年中いい匂いのする果物がたわわに実り、花が咲き乱れる庭園も作る。パルパサ・カフェからヒ

---

[4] ヘビースモーカーであることを冗談めかして揶揄されたのに対して軽く苛立ちを覚えた。政情不安の中、人を撃つ事件が多発している昨今、喫煙ぐらいで目くじら立てなさんな、ということ。

[5] 原文はBābiyo。屋根を葺いたり綱を編んだりするのに使われる植物。

マラヤ山麓まで四日間で行けるトレッキング・ルートも開拓できないかと画策しているのだ、と彼は言う。

こういうものを創るために、今この時期は大丈夫なのか？障害にぶち当たる羽目になるんじゃないか？

僕はドリシェの計画に反対するのではない。こんな時期に彼はこの計画を頑固にやり遂げようとしている。だがこういう計画を骨抜きにしてしまうために、この国は銃を構えている。しかも彼は、銃に反対して立ち上がろうとしているのだ。

コーヒーを一口啜ったと同時に、他のテーブルからミャーオと鳴きながら猫が近づいてきた。僕が〝煙をもうもうと吹きながら〟書くことに没頭する写真入りで「ワグレ氏、小説を執筆中」という記事が掲載されたのは週刊『ネパール』誌だったが、ちょうど同じ号の別の記事には、僕がよく行く或る別のレストランに入りびたる猫にまつわる四方山話が載っていた。それにそっくりの猫が僕の方にやって来たのだ。そばにはよく育った鉢植えのポインセチアがあり、造り物のような真っ赤な花を幾つもつけていた。猫は僕の膝に乗っかった。記事の中の、別のレストランにいる猫とおなじように。

ドリシェはどうしたんだ、そろそろ着くはずだが？一杯目のコーヒーを飲み終わって、また彼に携帯で電話した。猫はするりとテーブルの下に逃げた。

「こっちは友達が5人も来ちゃってさ」と彼は言った。「こいつらと話が終わり次第そちらに向かうよ」

変な〝友達〟がいるもんだな…と僕は訝しく思ったが、彼は「コーヒー飲んで待ってな」と言って電話を切った。

しばらくしてから気がついた。彼のところに来たのは、たぶん〝友達〟じゃないのだろうと。猫はまた僕の膝の上にもどってきた。僕がコーヒーを飲みこむのを、猫はうらやましそうに見ていた。

なんとなく猫を眺める。なんてのんびりとし、けだるそうなんだろう。この猫には、僕たちが生き抜いている波乱に満ちた情勢の心配などないのだ。つつがなき日々を過ごしているのだ。こいつは幸運を招ぶ猫にちがいない。だから、ここには世の中のさまざまな場所から旅人がやって来るんだ。むこうのテーブル席に座った旅行客の外国人女性が、僕の膝の上の猫を写真に撮っていた。彼女が撮った写真の中に僕も写っていたのだろうか？僕は少し心配になった。こういうご時世では、些細なことで心配になってしまう。

コーヒーをふたたび啜っていると携帯が鳴った「マオイスト[6]がバスを襲撃して爆弾を炸裂させ、森の隠れ家に逃げた。さいわい死者は出なかった」とドリシェは言った。「このニュースの速報を送らなくてはならないんでね。ちょっと遅くなるよ」と電話を切ろうとする。

---

[6] ネパール共産党毛沢東主義派。この小説が出た西暦2005年頃、民主化を求めて西部ネパールをはじめとする各地で武装闘争を繰り広げていた。

「なんで遅くなるんだ」

「こないだ警官が市民を警棒で殴った騒ぎがあったろう、あれ以来、まだ本社はバタバタしていてね」と彼。「今朝は威嚇射撃の銃声が聞こえた。学生たちはカレッジのキャンパスの中から石を投げてる」

「中古のおんぼろコンピュータでも買って、イーメールで送ればいいじゃないか。年がら年中ファックスばかり使ってたら通信費がばかにならないぞ」と僕。

「君が会社の経費から費用を前貸ししてくれるんなら、そうするんだがね」電話が切れると、猫はむこうのテーブルに行ってしまった。

ドリシェはまだ来ないなあ。僕はコーヒーをごくりと飲んだ。一向に現れる気配はない。パルパサ・カフェはどうなっちゃうんだ！

パルパサ・カフェの近くにあるという村はどんなだろう。家々の屋根は、渓流の石で葺いてある。黒い色の扉は、所々の隙間を漆喰で塞いである。壁には白土と黄土を塗り分けてある。白土を塗り広げた床は、水を打って清めてある。いつかドリシェは僕をその村に連れて行ってくれるだろう。そこに、彼の想像のカフェが建つことになるのだ。

僕は電話をかけた。電話に出た声はドリシェではなかった。怯えていた。

「あの人が連れて行かれちゃったの」ドリシェの秘書フラン・チョウドリだった。

「どこへ」僕は驚いて訊いた。

「さっきまで五人組が来ていて『話を聞きたい』と言うのよ」

「えっ？」僕の動揺は増大していく。

「保安隊員だと名乗っていたけど制服は着てなかったわ。ドリシェは携帯も持たせてもらえなかった」

「なんだって」背筋が寒くなった。〝友人〟たちがドリシェを誘拐したというのか？

「そうなの。どうしましょう」彼女は続けた「靴だって左右ちぐはぐのを履いて行ったわ」

そんなことが可能なのだろうか。大通りの人ごみの中でドリシェを5人組が取り囲み、白昼堂々と、周りの人びとが誰も不審感を抱かないようなやり方で誘拐するなんて。後で判ったことによると、隅に連れて行かれ、ヴァンに乗せられたのだという。そのヴァンは、前もってそこに停車していたにちがいない。白い色のヴァンだったそうだ。左右ちぐはぐの靴を履いて歩いていた若き才能ある画家ー僕の友ーが誘拐された。僕はここに座って、自分の小説を彼に聞かせようと待っていたのに。そしてそれは、彼の物語をまっさらなキャンバスに描いたものだ。でも彼はさらわれてしまった。僕がここでコーヒーを飲みながら、彼のコーヒーとアートの融合計画のことを考えているうちに。

知り合いの軍隊将官に電話して懇願した。〝このような状況下では〟、なにもしてあげられない、という答えだった。保安局への届け出はもう済んでいた。訪ね人の広告を新聞に掲載していいものかどうか躊躇した。軍指揮官のところに電話をしたが、会議中で席が外せないのだそうだ。ある少佐にかけると「報道担当官に訊いてみて」とたらい回しにされた。こんな時にかぎって、先ほどのウェーターがやって来て無駄話を叩こうとする。頼んでないだろ。ウェーターは、僕としゃべるための切っ掛け作りのために訊いた「もうオーダーはお済みですか」

「なんのオーダーのことですか」と僕はいらっとして言った。

携帯が鳴った。他県の記者だった。

「おつかれさまです。ニュースを一つ書き取っていただけますか。県の支局に電話したのですが、誰も出なかったので」

僕は急いでペンを取りだし、紙ナプキンにメモし始めた。雑音が混じる電話越しに、相手がニュースを読み上げ、僕がそれを書き取る。「今朝、偵察に出かけた統一保安軍は、本部から東距離８コース[7]に位置する渓流の暗がりの中でマオイストによる電気罠[8]にひっかかり、連絡が途絶えています」

こういうことが起こるのは、今日に始まったことではない。毎日、僕たちは同じような文面のニュースを報道してきた。今朝の新聞に載ったのと同じようなニュースを明日も報道することになるだろう。〝同じような〟とはつまり、保安隊員が音信不通とか、電気罠とか、爆弾破裂とか、〝捜索〟とは名ばかりの粛清とか、疫痢とか、背負い籠で保健所に搬送される途中で死亡とか…。毎日、新聞で新しい死体の数を数えることが、僕らの仕事だというのか。

「それで全部ですか」

「いや、もうひとつ別のニュースがある」僕はナプキンをもう一枚取ってメモった「現在の多量の降雪のため気温が急激に下がり、風邪が流行したため県の南部では７００人もの子供の命が失われました」

ナプキンを折りたたんでポケットに入れる前に、自分が書いた字を見てみた。青インク入りのはずの僕のペンからは、赤い文字が書かれてあった[9]。色が変わっただけで、自分の言葉そのものが変わってしまったかのようだ。コーヒーは冷めきっていた。

「民主主義は必ず到来する！」見降ろすと路地では、赤い旗を掲げながら走る学生たちの甲高い声がひびきわたっていた。広場で警察官が警棒を振りまわして殴りはじめたにもかかわらず、運動家たちは怯まなかったので、ついに威嚇射撃が行われ

---

7 南アジアの伝統的な距離の単位。1コースは約2マイルとされる。

8 vidyutty dharap. 電流線を張って作った罠。

9 気が動転していて、青インク入りと間違えて赤インク入りのボールペンを使って字を書いていたのに気づいた、ということだろうか。赤い文字というのは当時の社会状況を象徴しているのだろう。

た、という記事が載った新聞を、例のウェーターがいつの間にか持ってきていた。僕はトマトスープとフレンチポテトを注文した。下の方から、並びの店がディナータイムになると流すBGMのチベット民謡[10]がかすかに聞こえ始めた。風が強くなり始めた。大通りには大きな文字で粗っぽく〝民主主義ネパール万歳〟と書かれているのが目に入る。新聞記事には「学生側が『我々による〝世論調査〟の結果、大多数の意見は民主主義を支持する側についていることが判明した』と拡声器で発表した。それを合図に警官たちは白い文字[11]を靴で踏みにじってキャンパスに侵入した」とあった。ちょうど同じような激しいテンションで、僕のいる屋上レストランの下の路上でも集会が行われている。

花瓶の花が揺れたとき、再びドリシェのことを考えた。いったいどこの秘密の牢屋に閉じ込められているのか。抗争に巻き込まれたというニュースが入ってきたら、僕自身が新聞に見出しを書くことになるだろう。記事はどのくらいの大きさになるだろうか?だが、たくさん書いたところで、問題が解決するとでもいうのか。くそ!それにしてもドリシェをどうして捕まえ

---

[10] 実際には民謡ではなく、オン・マニ・ペメフムというチベット仏教の経文をヒーリング・ミュージック風にアレンジした歌のこと。今日でもタメルの外国人旅行者向けの土産物屋などでよくかかっている。

[11] 民主化を要求するスローガンを白ペンキあるいはチョークで地面に書いた大文字。

たのか？彼が行こうとしていた山への旅について何を尋ねる必要があったのか？あるいは何かに関わっているという証拠が実際に出て、取り調べをすることになったのか？それとも、こんな情勢にもかかわらず山カフェなんかを作ろうとしていたのが怪しまれたのか？

心を落ち着かせようとコーヒーを何度もごくり、ごくりと飲んでいるうちに、タメル地区のツーリストの賑わいの中、あちこちに電気が灯り始めた。猫は膝から素早くテーブルの上に登って座り、僕がノートをぱらぱらとめくるのを見ていた。猫の緑色の眼の奥に、友をさらわれたことの心の痛みを隠して、僕は、書きかけの小説の原稿のページをめくり始めた。僕が読んでいるのは、この国の憲法だというような気がして来た。パラグラフ（段落・条項）をひとつずつ読み進むごとに、基本的人権の一連の条文が垣間見えてくるようだった。遵守するはずの者たち自らが、この条文をないがしろにしてしまい、世界のこの開いた一ページから、僕の登場人物が行方知らずになってしまう恐れがあった。憲法の条文のように、誘拐されたドリシェについてのこの物語は、草稿のままで僕の前に置かれているのだ。僕は今日、彼の記事を書くことになるんだろうか？そうすれば、秘書フランは事件について大衆に広く訴えることができるだろう。新聞社の編集部の同僚たちは言うだろう「釈放を要求するためには、他にもいろいろな手段があります。あらゆる手だてを尽くして記事を作成してみてはどうでしょう」

僕は新聞社に戻って、自分の小説の主人公が登場する記事を編集しなくてはならない。そして僕の友人は、誘拐され行方不明になった人たちの氏名の長々としたリストに含まれることになるのだ。

「もしもし」フランからまた電話だ。「あなたも気をつけてね」

「なんで？」

「あの人たちは他の書類や、それに写真も持って行ったわ」

「それで？」

彼女は答えた「その写真には、あなたも写っていたのよ」

（以下、次号に続く）

著者と作品について

著者ナラヤン・ワグレ（Narayan Wagle）はネパールの優れた編集長の一人である。ジャーナリストとして２０年にわたるキャリアを積み、その間、報道記者として様々な地域に旅した。そういった取材旅行の多くは徒歩で行われ、ネパールが王制から民主制に切り替わり、内戦から平和に移行するドラマティックな政治的変遷を第一線で経験した。最初の小説『パルパサ・カフェ』は２００５年に出版され、同年、ネパールの文学賞として最も権威あるマダン賞（Madan Puraskār）を受賞し、ベストセラーとなって５０，０００部という圧倒的な売れ行きを記

録した。英訳と韓国語訳がある。

原題『パルパサ・カフェ』は日本人読者には分かりにくいと思われたため、訳者が『ネパール・アートカフェ計画』という副題を付けた。ただし物語は実際には、アートカフェ計画の実行というよりも、むしろそれを阻む当時の困難な社会的状況を描いてゆくことになる。今後も続けて翻訳していこうと考えているので、乞御期待。

【注記】ネパール語のカタカナ転写について

現代ネパール語では、母音の長短の区別は消失している。例えばナーガリー文字 ā と a で書かれる二つの母音の違いは、長さにはなく、質的なものである。ā は広口の母音であり、a は曖昧母音 [ə] である。

ただし、実際の発音では音節の位置や強勢の位置により、或る一単語の中の或る母音が他の母音よりも長めになることがある。特に、一音節や二音節から構成される短い単語で、この傾向が強い。たくさんの音節からなる長い単語では各母音が短く発音される。このことを考慮して、カタカナ表記の際に適宜、長音を用いることにした。

Nārāyaṇ Vāgle: Palpasā Kyāphe. Pablikesan Nepālay, Kāṭh'māḍauṃ. Vidyārthī saṃskaraṇ 2008. (Pahilo saṃskaraṇ 2005)

英訳 Narayan Wagle: Palpasa Café. Publication Nepalaya, Kathmandu. Third edtion 2012. (First edition 2008)

पल्पसा क्याफे (2005)
नारायण वाग्ले
पब्लिकेसन नेपा~लय, 2008